

# 形容詞述語文の表出用法について

近藤 研至

## About the Expression usage of the Japanese Adjective Predicate Sentence

Kenji Kondo

This paper discusses expression usage of the Japanese adjective predicate sentence. The expression usage has prototype and *i*-dropped type, such as *atsui!*, *atsu!* “hot!”. Two types have five common properties. It is to have having recognition contents, thing recognizing at a place of the utterance, not arriving at the judgment, not trying transmission, and various feelings. The prototype is a basic form of the expression usage, but the *i*-dropped type is a model of the states of the recognition. Therefore *i*-dropped types have increased recently. In addition, *i*-dropped type can express various feelings. Two types may be emphasized at a place of the utterance. A used method is to insert an assimilated sound in a word and make vowel sound of the end of a word a long sound then, such as *a?tsui!* *a?tsu!*, *atsuRi!* *atsuR!*, *a?tsuRi!* *a?tsuR!*.

**Key words** : expression usage, prototype, *i*-dropped type

## 0 はじめに

たとえば、何かに触ったとき、その熱さゆえに、

(1) 熱い!

と発することがある。小論では、(1)のような表現を、形容詞述語文の「表出用法」と呼ぶことにする。表出用法とは、ある特定の時空間である刺激を受けることによって生じた認識を、ある情意を伴うことで表出している、形容詞述語文の発話における実現体の一つである。小論はこの表出用法について、表現の性質、統語的特徴を明らかにした上で、表出用法の形式のバラエティを記述するとともに、それぞれの形式の特徴について論じるものである。

なお、表出用法は、従来「感嘆文」と呼ばれる表現類型の一類型と共通する部分が多い。しかし、感嘆文は、高校時代の写真を眺めながら、何かを思い出しての

(2) 高校時代は楽しかったなあ。

という発話や、だれかの発言を伝聞して、

(3) ほんとにあいつはそんなことを言ったのか。

という発話も含む文類型であるが、表出用法は、ある現場において刺激を受けることで生じた認識を表出するという点で、もし仮に感嘆文であったとしてもかなり限定的である。そして表出であるがゆえの形態のバラエティを持つことから、小論では感嘆文とは切り離して論じることにする。

## 1 表出用法の性質

形容詞述語文は、

(4) このラーメンは熱い。

(5) このラーメンのスープは黒い。

など、ある対象に対して述定を行うことがあるが、表出用法はこうした対象についての述定を行っていない。あくまで現場で生じた発話者の認識を表出するものである。これは次のような感情を表現する形容詞述語文とも異なる。

(6) 寂しいなあ。

(7) 会いたいなあ。

これらは発話者の情意そのものを表現しているものであって、認識を表出しているものではない。表出用法は、発話者の、刺激を受けた現場での認識を、情意を伴って表出する表現を言う。

整理すると、表出用法の性質は以下のようになる。

(8) ① ある認識を抱いている

② その認識は、この場での経験した何かによって発生している

③ (ある認識が発生しているという) 状態の描写を行っているだけである

④ 誰かに何かを伝えようとしているわけではない

⑤ (驚いているなどの) 情意が生じている

①を「有認識内容性」、②を「現場誘因性」、③を「状態描写性(判断未達性)」、④を「非伝達性」、⑤を「情意性」としておこう。このうち、②から④までは表出用法である場合すべてに共通している性質であるが、①についてはその形容詞の知的意味が負担し、⑤は(表情、声の大きさなどを含めた)その発話状況全体によって実現される。ただし、ここで述べていることは、表現としての性質であって、文としての性質ではない。現場誘因性と状態描写性(判断未達性)と非伝達性は、確かに文の文法カテゴリーの制御に関わる部分があるが、有認識内容性については形容詞があることで実現するのであるから、統語的な制約の範囲ではな

い。また、情意性については、形態の成立には関与しない。

ここで現場誘因性について見てみよう。先に、「ある刺激を受けることによって」としたが、「受け方」としては(1)のような場合だけでなく、もう少し時間をかけてその刺激を受ける場合もある。たとえばとても暑い日に外に立っているときに、

(9) 暑い!

と発話する場合である。ある認識に至るまでに要する時間にはばらつきがある。「細い・太い」、「長い・短い」、「暗い・明るい」、「大きい・小さい」、「高い・低い」などの対象の属性の認識は、視覚的知覚によりもたらされ、認識にかかる時間は比較的短い。それに対して「やさしい・冷たい」「おもしろい・つまらない」「うざい」「チャライ」「エロい」などの属性の認識は、総合的な判断を必要とし、そうした認識までにはやはり時間がかかるだろう。さらに、「寂しい」「楽しい」「うれしい」「エモい」などの感情を抱くようになるには時間がかかる。感覚の場合は、「熱い」「痛い」は刺激を受けた直後にそうした感覚を抱くことができるだろうが、「暑い」「かゆい」という感覚を持つには時間がかかるだろう。評価にしても「すごい」という評価に至るにはやはり時間がかかる。このように認識に至る時間はまちまちであるが、そうした結果抱いた認識を表出するという点においては共通しており、すべての形容詞述語文は表出用法を持つ。

## 2 統語的特徴

形容詞述語文の構文形式には、「Xハ形容詞Y」((10) a) と「XハAガ形容詞B」((10) b) がある。

(10) a 葵ちゃんはかわいい。

b 葵君は背が高い。

こうした形容詞述語文において、表出用法の統語的特徴は、Xのあり様と、AガBあるいはYのあり様に観察できる。

## 2-1 Xのあり様

1で表出用法は述定ではないと述べた。このことはXのあり様に反映される。

(11) a うまい!      b エロい!      c 近い!

(12) a 楽しい!      b ヤバい!      c 懐かしい!

属性形容詞の場合((11))であっても感情形容詞の場合((12))であっても、表出用法ではXを持たない形容詞述語のみの場合がある。もちろん、このことはXの出現を許可しないというわけではなく、あくまで顕現しないことは傾向であるにすぎない。

(13) a このビール {ハ/φ} うまいよ。

b このビール {???ハ/φ} うまい!

述定の場合はaに見られるようにX「このビール」を顕在化させたとき、それを導入する助詞として提題の助詞ハは許可される。しかし、表出用法の場合、bのようにXを顕在化させることは許可されたとしても、それをハによって導入することは許可されにくい。Xを顕在化する場合は無助詞である方が座りがよいのである。菊池(2006)は、「ハは『それを話題にしてよい状況がすでに整っている』場合に、それを話題(主題)として提示し、それについて『語る』(何かを述べたり情報を求めたりする)ときに使う」とし、「φ(無助詞)」は「その場(対話の場)の関心固定ツール」としている。表出用法の現場誘因性からすると、ハは相性がよくないと言えるだろう。

ところでX自体についても、そこに現れる対象については少し制限がある。これも現場誘因性と関わることである。

(14) ???a あの料理、うまい！

b この料理、うまい！

「あの料理」の「味」は、発話時以前に経験したこととして誰かに伝達する場合以外はない。その結果、述定として表現されることはあっても、表出用法としてはあり得ない。それに対して「この料理」の「味」は食べている今において認識することが可能であり、表出用法としてあり得る。ただしこの問題は指示語の問題としては一般化されない。

(15) a あの子の泳ぎ、すごい！

???b この子の泳ぎ、すごい！

(15) a は現場誘因性を持つために、表出用法としてあり得るが、(15) b は（「この子」は目の前にいなければならないから）泳ぎ終わった後に属性として認識する以外なく、表出用法とはなりにくい。

XハAガBの表出用法の場合は、

(16) a この味噌汁 {???ハ/φ} 味 {ガ/φ} 濃い！

b この洋服 {???ハ/φ} 色 {ガ/φ} 黒い！

c お前 {???ハ/φ} くせ {ガ/φ} すごい！

に見られるように、Xについては無助詞が安定的であり、Aは無助詞の場合もガの場合も同程度に許可される。もちろん、

(17) a 味 {ガ/φ} 濃い！

b 色 {ガ/φ} 黒い！

c くせ {ガ/φ} すごい！

のようにXそのものが顕現しない場合も多い。

## 2-2 AガB、あるいはYのあり様

次に、BとYのあり様の統語的特徴を見てみよう。表出用法の性質として述べた「判断未達性」と「現場誘因性」と「非伝達性」は述語の形

態について制限を与える。判断未達性とは、その認識が生じたことをそのまま提示するということであって、命題に対する真偽判断などを付していないという性質を言う<sup>1</sup>。そのため、

(18) a \*熱いだろう！    b \*熱いかもしれない！    c \*熱いようだ！  
など、モーダルの形式を伴った表出用法はない。ただし、しばしば判断系の文法カテゴリーとして扱われることがある、時制と肯定・否定<sup>2</sup>については現れることがある。

まず時制について見てみよう。時制については現場誘因性が関わる。たとえば、お化け屋敷に入って、

(19) a 怖い！

は表出用法である。しかし、お化け屋敷から出てきた直後の

b 怖かった！

もまた表出用法と言える。認識の発生には「(新規)出現」による発生と「解消」による発生がある。aは出現による発生であるが、bは、「怖い」認識が継続していて、それが何かを契機（この場合は「お化け屋敷を出る」という契機）として、「怖いが解消された」という認識である。このような解消による認識の発生を表現するとき、(19) bのようにタ形はあり得る。ちなみに、これは、

(20) あの時は怖かった。

とは違う。(20)は、「あの時」という特定の基準時を設定し、そのときの状態を描写しているのであって、表出用法ではない。

続けて、肯定・否定について見てみよう。たとえば注文したラーメンが出てきて、一口スープを飲んだ直後に発せられた、

1 これは益岡(1991)が述べている情意表出性と似る。

2 益岡(1991)は判断系のモダリティとして、時制は「テンスのモダリティ」と、肯定・否定は「みとめ方のモダリティ」として扱っている。

(21) a ぬるい！

b 熱くない！

という二つの発話は、いずれも表出用法と言える。この二つはその事態を経験するにあたって、事前の認識の予想等があるかないかを反映している。aは「ラーメンのスープは熱いものだ」という前提的な認識がある場合にも無い場合にもあり得る発話であるが、bはそうした前提的な認識がなければ発話できない。これらは、

(22) a うわ！ぬるい！ / あれ？ぬるい！

b あれ？熱くない！

というように、感動詞の現われも若干違うものになるだろう。

続いて非伝達性によって制御される文法カテゴリーを見てみよう。これは文全体の形態に関わる問題であって、述語部分に限定されたこととは言えない。丁寧体が普通体かという対立は、聞き手がいるかないかといった状況において発生する。表出用法が非伝達性を有している限り、こうした対立もなく、有標形であるところの丁寧体は現れない。またこの非伝達性は、聞き手不在であることから、聞き手目当てであることを前提に付加される、ヨやネなどの終助詞は現れない。それに対して、ひとり言を確定するナアなどの終助詞は現れやすい。

なお、文法カテゴリーではないが、現場誘因性に抵触する場合、Y（あるいはB）の位置に立てないという制約がある。たとえば、「寂しい」や「つらい」において、そうした感情が引き起こされる契機が、「父が死んだこと」や「仕事上の人間関係」など発話時以前にある事柄によってもたらされた場合は現場誘因的でない。しかし、談話の現場、発話内容などにそうした感情の出現の契機がある場合には現場誘因性が発生し、「さみしい！」「つらい！」といった表出用法が可能になる。



### 3 表出用法の強調

ここまでで取り上げてきた形態は、

(23) くさい！

のような形態であり、これを表出用法の「基本型」と呼ぼう。表出用法は、こうした基本型のほかにも、

(24) a くっさい！    b くさーい！    c くっさーい！

のような形式もある。これら三つの表現タイプは、基本型に、発音による強調を施したタイプである。(24) a を促音挿入タイプ、(24) b を長音化タイプ、(24) c を併用タイプとしておこう。

#### 3-1 促音挿入タイプ

強調するために促音は語のどの部分に挿入されるのであろうか。まず、「くっさい」のように、イの直前には促音は挿入されない。それ以外の部分については、富山他(2001)が示唆的な報告をしている。富山他(2001)は4モーラの無意味形容詞を強調しようとするときに、どの音節の間に促音が挿入されやすい傾向があるのかということを実証的に示したものである。結果、1-2間の方が、3-4間よりも挿入されやすいということと、促音は摩擦部よりも閉鎖部を伸長して生成されやすいということを報告している。ただし、この富山他(2001)では、無意味形容詞を扱っているがゆえに、複合形容詞についての考察ができていない。例えば、「腹黒い」「細長い」など複合形容詞の場合、「はっらぐろい」「ほっそながい」など前項要素中に挿入される場合はもちろんだが、「はらっぐろい」「ほっそながい」のような前項と後項の間や、「はらぐっろい」「ほそながい」のように後項要素中に挿入される場合もある。また、「痛々しい」などの反復型形容詞においても、「いたいたしい」と「いったいたしい」が同居していることなどについては指摘され得ない。

以上は富山他(2001)が、無意味形容詞を扱い、音声的環境のみから促音挿入に迫っているために気づかれていない問題であろう。また、こうした意味がからんだ問題以外でも、富山他(2001)は促音が挿入されやすい環境で実験をしているために、「まっるい」「あっまい」「あっおい」「すっごい」「やっばい」など、音声的に促音が割り込みにくい環境にも現われることは報告されていない。

### 3-2 長音化タイプ

郡(1988)は「すごい」「高い」と「すごーい」「たかーい」を例に引き、「形容詞(中略)の場合、どの語でも語幹末の母音を伸ばすことが頻繁に行われる」とする。ただし「熱っばい」「あほらしい」などの派生形容詞においては、「熱っばーい」「あほらしーい」になり、長音化が起きているところが接辞内であり、「語幹末」とは言えない。このことから、「語幹末」ではなく「イの直前」とした方がいい。その他、郡自身も指摘しているが、頻繁ではないが、「からい」「すごい」が「かーらい」や「すーごい」のように、イの直前以外の母音が長音化されることもある<sup>3</sup>。また、長音化は一語において一ヶ所であるとは限らない。たとえば相当な「暑さ」を感じて、「あーつーい！」という表出もあり得る。

複合形容詞においては「腹黒い」「細長い」は、「はらぐろーい」「ほそながーい」という場合が多い。「はーらぐろい」「ほーそながい」のように前項部の母音のみが長音化されることはほとんどない。ただし、「はーらーぐろーい」など複数個所に現れることはある。また「重々し

3 「あまり頻繁ではないが、スーゴイ、ターカクなどと語頭の拍の中の母音を伸ばすこともある」と指摘している。

い」のような反復型形容詞の場合は、「重々しい」というように、やはりイの直前母音が長音化されている。もちろん、「おももおもしろい」も「おもーおもーしい」などもある。

### 3-3 併用タイプ

郡（1988）は「強調の度合いが大きければデーッカイのように語頭拍の母音も同時に伸びる。さらにデッカーイ、デーッカイなどと語幹末の母音の延伸との併用もできる」と指摘している。こうした併用タイプは、小論で指摘した、「促音挿入がイの前にはなされない」・「1-2音節間に挿入されやすい」ということと、長音化は「イの直前母音になされやすい」ということの組み合わせからすれば、「でっかい」という併用が基本的であろう。

複合形容詞においては、「はーらっぐろい」と「はっらーぐろい」、「ほーそながい」と「ほっそーながい」のように前項部位にのみ現れることはなく、「はっらぐろーい」「はーらぐっろい」、「ほっそながーい」「ほーそながい」など前項と後項にそれぞれ現れる組み合わせと、「はらぐっろーい」「ほそながーい」のように後項要素中に双方が現れることがある。

## 4 イ落ち型について

### 4-1 イ落ちの性質

近年、多くの研究者に積極的に取り上げられている

(25) あつ！

という発話の型がある。この形態は従来いろいろな呼び名を以て取り上げられているが、小論では「水っぼい」、「しょっばい」について、「みずっぽ!」「しょっっ!」といったように、接尾辞の一部を、即ち語幹

ではないところまでを「残して」おり、イのみが顕現しない形態であるところから、「語幹用法」<sup>4</sup>などの呼び名ではなく、今野（2012）に倣って「イ落ち」と呼ぶことにする。

富樫（2006）はイ落ちが現れるための「制約」として、「瞬時的・現場的な事態の認識に限られる（結果的に事態は外的なものが多い）」ということと「非伝達的」を指摘した。ただ、この「制約」は富樫自身も含めて、その後の研究では、それがイ落ちの特性であるように扱われており、今野（2012）でも、「イ落ち構文は、話者が、眼前の事態や対象に対し、瞬時的現在時の直感的な感覚や判断を表出する私的表現行為専門の構文である。」という形で継承されている。こうしたイ落ちの性質は、小論が表出用法の性質とした、現場誘因性、判断未達性、非伝達性ということとほぼ重なる。そして形容詞の「語幹」が残っている（もちろんこのことは残っているのが「語幹だけ」ということとは違う）ことから、有認識内容性もある。そして「あつ！」と発話されたとき、そこには驚きなどの情意が伴っており、情意性についてもイ落ちは有している。こうしたことから、今野が「表出する」と指摘しているように、イ落ちは表出用法の一つだと言うことができ、以後、表出用法の型の一つとして「イ落ち型」と呼ぶことにする<sup>5</sup>。

4 「語幹」に着目した呼び名としては、「語幹のみによる独立用法」（飯豊（1973））、「形容詞語幹単独用法」（富樫（2006））、「形容詞語幹終止用法」（原田（2012））、「形容詞語幹基用法」（近藤（2014））、「形容詞語幹型感動文」（清水（2015））などがある。

5 従来のイ落ちについての研究は、イ落ちそのものを独立した一つの文形式として扱うものと表現の類型の中の一つのタイプとして扱うものとに分かれる。前者の典型は富樫（2006）と今野（2012）である。後者は形容詞の用法の一つとする飯豊（1973）、「喚体句」の一つのタイプとする笹井（2005）、「形容詞述語文」の一つのタイプとする近藤（2014）の他にも、少し変わったところでは「一語文」の一つとする小池（2002）、「即時文」の一つとする岩崎・大野（2007）などがある。清水（2015）は笹井（2005）の視座を踏襲し「形容詞語幹型感動文」と扱うのであるが、「感動文」とはしているものの、その他の「感動文」との関係の中で考察しているわけではないため、基本的には今野（2012）などと同じ姿勢であると言えるだろう。小論は後者の視座から取り上げる。

ただし一つだけ注意が必要である。それは富樫（2006）で言われている「瞬間的な事態の認識」という性質についてである。これは「刺激を受けてから、認識が生じるまでが瞬間的」を言うのか、「認識が生じてから発話されるまでが瞬間的」を言うのか、実は明確にされていない。基本型について考察したときに、認識に至るまでの時間にはばらつきがあることについて触れた。たとえば、作り立てのたこ焼きを食べる場面を想定してみよう。

(26) a あつ！

b うま！

a と b は認識に至るまでにかかる時間は異なり、もしそれが「瞬間的」と関わるとするならば、(26) b のイ落ち型は容認されない形態になる。しかし (26) b は許可される。

では次の例はどうか。出演者がみんなで絡んでいる中、一人のアイドルがある出来事の生起に対して（かぶせ気味に）ある反応を即座にした。その時、出演者は全員、その反応に対して大きな声で笑った後に、

(27) はや！（2018年11月25日テレビ東京放送「ゴッドタン」より）  
と発話した。これは「早い」という認識が生じてすぐに発話したわけではなく、よって「瞬間的」というのが、認識が生じてから発話されるまでの時間を言うのではないということになる。

表出が行われる場合、刺激から認識に至るまでの時間や、認識してから発話するまでの時間などが「瞬間的である」場合もあるだろう。しかし、上で見たように、「瞬間的」といった性質は、表出用法にとっての必然ではない。瞬間的よりも、小論が指摘した現場誘因性の方が必然的な条件と言え、瞬間的というのは、そうした条件下で生じる一つのあり様だと言える。

#### 4-2 イ落ち型の形態的特徴

イ落ち型は2で述べた、表出用法の基本型と同じ統語特徴を有する。形容詞述語文には構文タイプとして、「Xハ形容詞Y」と「XハAガ形容詞B」の二つがあることを述べた。イ落ちもまたこの構文タイプを持つ。「XハY」タイプは、

(28) a かわいい!

b あの子 {\*ハ/φ} かわいい!

aのようにXが顕在しないか、bのように顕在しても無助詞であるかのいずれかである<sup>6</sup>。また、「XハAガB」タイプについては

(29) a 鼻 {???ガ/φ} 長!

b 象 {\*ハ/φ} 鼻 {???ガ/φ} 長!

aのようにXは顕現せず、Aも無助詞の方が座りがいい。またbのようにXを顕現させたとしても、無助詞であることが基本である。

続いて、Y、あるいはAガBについて見てみよう。基本型の場合、表出用法の性質を反映して、判断系のモダリティと伝達のモダリティの現われは制限される。イ落ちの場合もこれと同じである。

(30) a \*寒だろう!    b \*寒かもしれない!    c \*寒ようだ!

基本型は、判断系のモダリティとして扱われることのある時制と肯定・否定については、現場誘因性から現れる可能性があることを指摘した。しかしイ落ちの場合は

(31) a \*体、でかた!

b \*体、でかない!

のように、有標形であるタ形と否定形は現れない。

また以下は基本型と同様述語部分だけの問題ではなく文全体の問題で

6 無助詞であることは富樫(2006)も指摘している。

あるが、非伝達性であることから

(32) a \*にがよ!      b \*にがです!

のように、聞き手目当ての終助詞は現れない。その上、基本型では許可されるひとり言を特徴づける終助詞ナアも、

(33) \*にがなあ。

のように現れない。

以上見てきたイ落ち型の特徴<sup>7</sup>は、表出用法の性質を反映したものであることが多いが、中には、「イ落ちであること」を反映したものであることもいくつかある。たとえばAガBにおいて、助詞ガが現れにくいという現象は、イ落ちが非活用語的で、そこにあたかも「名詞が並ぶ」といった印象から、その箇所だけに助詞が現れることの座りの悪さが起因していると言えるだろう。また、有標形のタ形と否定形を許可しないことと、(聞き手目当ての終助詞だけでなく)終助詞全体が現れないことは、イがないことで当該形容詞の活用が不可能であるということに起因していると言えよう。

### 4-3 イ落ち型の強調のタイプ

#### 4-3-1 イ落ち型と基本型の強調のタイプ

イ落ち型の基本は「あつ!」という型であるが、これも基本型と同じように、次のような強調のタイプを持つ。

(34) a あっつー!

---

7 以上の多くは、今野(2012)が指摘していることと共通している。今野(2012)は、イ落ち構文の文法的な特徴として、「否定辞」「時制」「補文化辞」が現れないことを指摘している。小論は、形容詞述語文の構文タイプに分け、さらに表出用法の性質から、基本型のXあるいはY、AガBの要素制限を観察し、さらにそれをイ落ち型にも共通しているのかという観察を行った。結論は重なるところが多いが、接近法が異なることから、今野(2012)を引用するということを行っていない。

b あつー！

c あっつ！

富樫 (2006) は、「あつ！」のような形態を（富樫は「あつっ」というように促音が付加されているとし）「促音型」と呼び、(34) a、b のタイプを「長音型」と呼んでいる。なお、富樫は末尾形態に着目しているため、(34) c の形態は取り上げていない。

小論では、3において基本型の強調のタイプを考察した。そうした視座から言えば、小論ではこの(34)の三つの表現は、いずれもイ落ち型の強調タイプだと扱う。すなわち富樫が「促音型」と「長音型」の対立を述べたのとは異なって、イ落ち型には基本的な形態である、「あつ！」のような「○○！」があり、表現の場において強調化を施すときに、基本型と同様に、促音挿入タイプ((34) c)と長音化タイプ((34) b)と併用タイプ((34) a)があると捉える。どの音節位置にそれぞれの強調が施されるのかということについては、単純形容詞においても複合形容詞、派生形容詞などの合成形容詞においても、イ落ち型は基本型と変わらない。

(35) a あっつい！      b あっつ！

(36) a あつーい！      b あつー！

(37) a あっつーい！      b あっつー！

(38) a はらぐろい！      はらぐろい！      はらぐろい！

b はらぐろ！      はらぐろ！      はらぐろ！

(39) a はーらぐろい！      はらぐろーい！      はらぐろーい！

b はーらぐろ！      はらぐろー！      はらぐろー！

ただし、挿入箇所を説明する折に、基本型において「イの直前」としたことは、イ落ち型にはイがないため、「末尾」と言われることもあるだろうが、現れる位置は同じである。



なお、反復型形容詞のイ落ち型の長音化タイプについて少し注意しておこう。反復型形容詞は「重々しい」「たどたどしい」など、反復形式+シイによって構成されている。それがイ落ちになったとき、「重々し!」「たどたどし!」であるが、「最終母音が長音化する」という強調によると、「重々しー!」「たどたどしー!」となる。しかし強調の場合、長音化されている間アクセントはずっと高いままであることから、「重々しい!」「たどたどしい!」という基本型とは表現上区別できる。

#### 4-3-2 イ落ち型の末尾促音の問題

富樫（2006）で「促音型」と言われているように、イ落ち型についてしばしば議論になるところに、末尾促音の問題がある。イ落ちについての考察ではイ落ちについてのみの観察を行っていることが多く、その結果、イ落ちの形態的特徴として末尾促音があると指摘されるが、実は、

- (40) 「ああああッ」「歯を喰いしばれーッ」「情けないぞ 小林くん  
私の才能に嫉妬してそんなデタラメをっ」「馬鹿なっ」「わあ出たッ」「会社よ会社っ」「この歴史的な大発明を見たまえッ」「つっこめよっ」「それが畜生のあさましさというのだっ」「行けっ 伝送機械「乙」号ッ」「やだーっ ちょっとーっ ハエがーっ ハエがーっ」「ぬかりはないっ」「どーするのっ」（『ハラペーニョ』pp120-122 唐沢なをき アスキー 1996年）

に見られるように、あらゆる表現形式の末尾に促音表記である「っ」を添えることが行われている。また形容詞述語文に限っても、「熱いっ!」などのように基本型にも付されることも多く見られる。

こうしたことについては那須（2017）の指摘が示唆的である。那須（2017）は、オノマトペを対象にして「ドキドキッ」などと表記されるオノマトペの語末促音について実証的な観察を行い、観察の結果、語末

促音は観察されないと結論づけている。そして、

たとえば、「痛い」「熱い」ということが瞬間的に発せられる様子を、「痛いっ」「熱いっ」といった促音含みの表記を以て表すことがあるが、この場合、「っ」が書き加えられたことで「痛い」「熱い」の語末に1モーラ分の子音の伸長が加わったとの解釈がなされることはまずない。むしろここでの「っ」は、発話に伴うある種のプロソディックな特徴を表現するための便法として用いられているというのが、実情に近いところであろう。

としている。またイ落ちに言及している原田（2013）は

実際の会話では調音器官の閉鎖を特に伴わずに「すご。」などと発話されることも普通であることと、文末では調音器官の閉鎖の有無を聞き分けるのが難しい（以下略）

としている。末尾に実際促音があるかどうかの認定が困難であることと、さらにあらゆる表現に促音記号である「っ」を添えて表記することがあるということから、小論では、イ落ち型における形態的な特徴として末尾に促音があるとは考えず、さらに基本型の表記にも「っ」を採択していないことから、「○○っ」とは表記しない。そしてその形態を富樫のように「促音型」とは呼ばない<sup>8</sup>。

## 5 基本型とイ落ち型

ここまでは表出用法ということで基本型とイ落ち型との共通点について

---

8 立石（2012）は、イ落ちに促音を積極的に認めようとする立場である。「イ落ち」は、形容詞語幹の基底形が子音/k/を末尾に含み、この語幹末子音/k/と接尾辞「っ」の子音連続が引き起こす必異原理が回避された結果によって生じている現象で、言うなれば（イ落ちと言うより）「促音付加である」とする。しかし、もし、末尾に「促音」があるとするならば、そこに1モーラ分の子音の伸長が加わっているということになる。しかしこれまでに、そこに1モーラ分の子音があるという観察をしているものはない。立石（2012）にしても、こうしたことについて実証的な観察をしているわけではない。

で取り上げてきた。では、基本型とイ落ち型との相違点はどこにあるのだろうか。

ドルヌ+小林(2005)で「関西以外ではまだそれほど多くない」と言われているイ落ち型が、現在言語研究の主題として取り上げられるほどになっているのは、使用頻度が拡大しているからである。富樫(2006)の頃でも「感情形容詞では現れにくい」や「程度表現との非共起」や「2モーラ形容詞のイ落ち不可」などが指摘されていたのであるが、今では「さみし!」「楽し!」「ちょーこわ!」などはいくらでも聞かれるし、「こ!(濃い)」「よ!(よい)」も普通にある。そして今野(2012)において否定辞がないと指摘されたことにしても、「かわいくな!(かわいくない)」「おいしくな!(おいしくない)」など、否定辞を含んだ形式のイ落ち型は会話においてよく聞かれるし、SNS上にも散見する。このようなイ落ち型の使用の広がり、イ落ち型は表出用法のタイプとしては熟したものでなかったから「広がり」と言えるだけであって、そもそも基本型があり、イ落ち型がそれと同じ状況でも使われるようになっていくという見方が説得力のあるものではないだろうか。またこれは次のようにも説明できる。基本型では「解消による認識の発生」と「前提を持つ場合の認識のあり方」についても対応する形式であるということを示した。しかし、イ落ち型は、「出現による認識の発生」と「前提を持たない現場誘因的な認識」という認識のあり様のみに対応しており、そうした認識のあり様こそ、形容詞述語文の表出用法における典型的な認識のあり様なのだという解釈である。この解釈は、上での説明と矛盾しない。即ち、典型的であるがゆえに、イ落ち型の使用頻度が増えてきたと言えるからである。

さらに表現性の側面から、イ落ちについて述べてみよう。小論では表出用法の性質として「情意性」を指摘し、これは「形態の成立には関与

しない」と述べた。先行研究中、イ落ち型は「感動文」であるなど、その表現の情意性に注目した指摘はされたことはあるが、それが具体的に形態の問題というレベルで論じられたことはなかった<sup>9</sup>。基本型で情意性を表現しようとするれば、それは表現が持っている形態以外の要素の補いによって実現しなければならない。これが先に「形態の成立には関与しない」としたことである。しかし、もし、イ落ち型を以て表現すれば、それはその情意性を、形態的に表現することが可能になる。イ落ち型が好まれることは、こうした表現上の「わかりやすさ」ということもあると思われる。小論でイ落ち型を表記する際「○○！」を採用したのは、那須（2017）のことばを借りれば、基本型の情意性を表現するための便法であって、もしイ落ち型なら、イ落ちという形態だけで充分で、原田（2013）が採用している「○○。」という表記で満たされ、情意性を表す便法としての「！」は必要ないかもしれない。

## 6 おわりに

小論で扱った表出用法は、「犬だ!」「部屋が丸くなっている!」「あ、間違えた!」「ドロドロだ!」などの、いろいろな述語文の実現体にも見られる用法である。そしていくつかの述語のタイプではイ落ち型と同じように「どろどろ!」など語尾が現れない表出用法の型が見られたり、さらに動詞述語文のように、そうした型を持たない場合もある。また、「犬!」は従来「一語文」として扱われてきたが、名詞述語文のダがないタイプと同じなのか違うのか。こうした多くの問題が課題として残っている。さらに強調については、実験を通して証明しなければなら

9 笹井（2005）は「感動文に表現されているのは、語列自身が構成する「コト」に対する話し手の情意だと考えられる」と述べる。しかし、これはどういうことを具体的に言っているのかわかりづらい。

ないことが多い。以上については今後の課題とする。

### 【引用文献】

- 飯豊毅一（1973）「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」（『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』明治書院）
- 岩崎勝一・大野剛（2007）「『即時文』・『非即時文』一言語学の方法論と既成概念—」（申田他編『時間の中の文と発話』135-157 ひつじ書房）
- 菊池康人（2006）「主題のハと、いわゆる主題性の無助詞」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎（編）『日本語文法の新地平 2』くろしお出版
- 小池清治（2002）項目「一語文」（『日本語表現・文型事典』小池他編朝倉書店）
- 郡 史郎（1988）「強調とイントネーション」（『講座日本語と日本語教育』2 杉藤美代子編 明治書院）
- 近藤研至（2014）「『形容詞語基用法』について」（『日本語史の新視点と現代日本語』小林賢次・小林千草編 勉誠出版）
- 今野弘章（2012）「イ落ち：形と意味のインターフェイスの観点から」（『言語研究 141』日本言語学会）
- 笹井香（2005）「現代語の感動喚体句の構造と形式」（『日本文藝研究』57（2）：1-21 関西学院大学日本文学会）
- 清水泰行（2015）「現代語の形容詞語幹感動文の構造 — 「句的体言」の構造と「小節」の構造との対立を中心として—」（『言語研究』148 123-141）
- 立石浩一（2012）「い落ち」表現を端緒とする言語学的諸問題」（『神戸女学院大学論集』59（2）159-168）

- 富樫純一（2006）「形容詞語幹単独用法について—その制約と心的手続き—」（『日本語学会 2006年度春季大会予稿集』165-172）
- 富山仁郎他（2001）「無意味形容詞の強調における促音の挿入位置分析」（『日本音響学会講演論文集』）
- 那須昭夫（2017）「いわゆる語末促音の知覚に寄与する韻律特徴」（『筑波日本語研究』21：1-18）
- 原田幸一（2013）「大学生の日常会話における形容詞語幹終止用法」（『言語社会』7 341-327 一橋大学）
- フランス・ドルヌ+小林康夫（2005）『日本語の森を歩いて フランス語から見た日本語学』講談社現代新書
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版